

「き、来たわよ……」

「あいかわらずすごい身体
たまんないね」



「そ、そんなことないわよ

ちよつと鍛えてるくらいで」

「鍛えててもそんなに胸は
でかくならないよ」

「早くしようか」

「オレもう我慢できない」

「い、いつも思うけど」

「す、すごい大きいわよね」

「あなたのそれ」

ズ
ウン

「それって？」

「ちゃんとやってくれないと」

「ペ、ペコス…」

「いいねえ、興奮する」

「今日は思いっきりやりたい気分なんだ」

「そ、そうなの？」

「思っっちゃう…っ。」

「あーっ……」

「んんんんん！」

んんんんん

「めつと奥……まどろい」

「んんん……」

んんんんん……んんんんん……」



「ああ、気持ちいい……」

「ん、んん……、んっー!」

ズポッ

ズポッ

ズッ

「めんど舌も絡ませて!」

「ふ……ふ、まひ……ひ、

く、苦……く、し……し……

んんんんん!」

「……ん、くの」

「まだ先っぽの方しか

入ってないよ。もっと

ケツ落として」



「げ、ケツって言わないで
せめておしり……っ
んんん……っ
「っ」

「そうそう」

あと少しで根元まで入る」

「ま、まだ最後まで

入ってないの……？」

「まだまだあるよ」

ほら、もっとケツを

落としてくれないと」

「あ、もう……」

お、お、奥に……」

ちよつと待つ……」

ズ
ズ
ズ

「まったく……、仕方ないな」

「すごい跳ねてるね笑
もつと下から突き上げてあげるよ」

「あああっ……!!
そんなに…、強く
突き上げないでっ」



「あんなに濡れるの初めて」

「...」

ブルン

ズン
パツ
パツ

「あんなに濡れるの初めて」

「...」

「...」



「少し、休ませて…」

今日はっ激しすぎる…っ」

「え？」

まだフェラと少し下から

突いただけじゃん」

グ

グ

「だけって…っ

んんっ…！くっ…

う、動かないで…」

「全然これからだよ」

ズク

ー

「そ、そんな……
あん！あっ！うっ！うっ！」



「次は後ろから突くぞ」

ズ

ズ

「あぁあぁー！
〜っ…、ん、ん…」



「おらおらっー!!」

どうだ!もつと突くぞー!

ッ

ッ

ッ

ッ

ッ

「あああああっ!

うッあああイクッ

イクっ…♡

っ、突いてっー!!」

「！
いいね。春麗もこの激しさ
慣れてきたのか？」

の
ッ
パ
ン
ッ

「はい、こんなのに
慣れるわけない……！
で、でも、イクっ！」



「あああ、そろそろイキそう
ラストスパードだ！」

「.....」





「イクっ!」

「ジュルルル」

「ドクドク」

「あああああああ
あああああああ
あああ!.....!」

「舐めてくれよ」

チュッ

く、む…
「んんん」



「え、ちよつと…」

お、終わったんじゃないの？

…んんんん！…！！…！！」

「いやいや、あれだけで

終わるわけないじゃん」

ズ
ズ
ズ

「あれだけって…」



「夜はまだまだ長いよ」

ブルン

ブルン

パッパッ

「うッあああ……！」
「あああああ♡」









































































「今日もするのね…」

「くくく、当然だろ」

「今日も拷問に耐えたみたいだが」

「セックスはどうかかな？」



「あなたがやっているのは」

「セックスなんかじゃないわ」

「凌辱だと言いたいのか？」

「まあなんでもいいさ。さっそくしようか」







